

氏名	栗原 光太郎			
ヨミガナ	クリハラ コウタロウ			
学位の種類	博士（音楽）			
学位記番号	博第 16 号			
学位授与年月日	2022 年 3 月 11 日			
学位論文題目	イタリア語の詩に対する F.P.トスティの取り扱いの態度について			
博士論文審査委員会	（主査）	教 授	小森 輝彦	（声楽）
	（副査）	教 授	水野 貴子	（声楽）
	（副査）	教 授	村田 千尋	（音楽学）
	（副査）	教 授	坂崎 則子	（音楽学）
	（副査）		中巻 寛子	（声楽）
			（愛知県立芸術大学教授）	
博士演奏等審査委員会	（主査）	教 授	小森 輝彦	（声楽）
	（副査）	教 授	水野 貴子	（声楽）
	（副査）	准教授	秋山 隆典	（声楽）
	（副査）	教 授	小串 俊寿	（サクソフォーン）
	（副査）	教 授	糀場 富美子	（作曲、ソルフェージュ）
	（副査）	教 授	村田 千尋	（音楽学）
	（副査）	准教授	御邊 典一	（ピアノ）
	（副査）		小原 啓楼	（声楽）
			（聖徳大学講師）	

## 審査結果の要旨

### 1. 博士論文審査委員会

日	時	2022 年 2 月 7 日（月）13 時 00 分～15 時 30 分
場	所	東京音楽大学 池袋キャンパス A 地下 102
判	定	合格とする
審査結果の要旨	<p>19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてイタリアおよびイギリスで活躍したトスティは、これまで通俗的な歌曲作曲家とみなされることが多かった。これに対して栗原光太郎氏の博士論文は、トスティがいかに詩の意味を大切にしているかということを実分析的、統計的に証明することによって、彼が本格的なイタリア歌曲の創出に関わったことを明らかにしようとするものである。このような視点はこれまでの日本におけるトスティ研究にはほとんど見られなかったものであり、意義あるものであろうし、その意図は概ね成功していると言えるだろう。</p> <p>9 月に行われた予備審査において、特に重要な指摘事項として示されたのは 1. 詩学用語である「アンジャンブマン」の理解が不十分である、2. イタリア語歌詞の訳に問題がある、3. 論述の順番に混乱があるという 3 点であった。これらの指摘に対して、栗原氏は真摯に向き合い、限られた時間の中でできる限りの修正を行ったと認められる。</p> <p>1. 「アンジャンブマン」という術語を「詩行を超えた意味のつながり」に改め、これに伴い従来は「意味上の切れ目」と呼んでいたものを「行中の意味上の切れ目」に改めることによって、本論文における着眼点を明確にし、議論の方向性を分かり易くした。しかし、「アンジャンブマン」の概念を採用しなかったことによって、詩行を制御している主要な理論のうちのひとつである「統語論」という観点を放棄することになり、詩を分析し理解するという点からすれば、かなり大きな損失である。もっとも、既存の論文を大きく変えずに、不備の指摘を修正するにはやむを得なかったものと思われる。</p> <p>2. イタリア語歌詞の問題として指摘されたのは、数々の誤訳と、対訳においてイタリア語と日本語訳が対応していないというものであった。これに対して栗原氏は、日本語訳を全面的に見直して日伊両国語が対応するように改め、さらに、論文末に全訳を掲載することによって修正を図っている。</p> <p>3. 論述の順番についても整理し直し、より分かり易い叙述になったと評価できる。</p> <p>以上のように、予備審査において提示された問題点について、それなりの修正が施され、論文としての精度が向上したと認められる。</p> <p>しかし、まだ様々な問題点が残されていることも確かである。</p> <p>第一に、「詩を重視する作曲法」は歌詞における意味のまとまりに対応した音楽構成だけに限定されるものではない。栗原氏も「序」、「第 2 章 研究方法」、「結論」において多少触れているが、「語りの表現」や「歌詞内容の描写」、「伴奏の用い方」など、様々な要素、見方が可能であり、博士論文として「言葉の重視」を主張するならば、広い視野から総合的な研究をすることが求められよう。</p> <p>第二に、トスティの全イタリア語歌曲を対象としているとはいえ、トスティだけに視線が向いているため、同時期の他の作曲家、特にトスティよりも若い世代の動向が目に入っていない。このような背景を抜きにして「リリカ・イタリアーナ」の誕生を論じるのは乱暴な議論と思われる。</p> <p>これらの点については、今後の研究課題として戴きたい。</p>	

## 2. 博士演奏等審査委員会

日	時	2019 年 7 月 17 日（水）19 時 00 分～20 時 00 分
場	所	東京音楽大学 池袋キャンパス B スタジオ
判	定	<p>トスティを通俗歌曲の作曲家ではなく、イタリア芸術歌曲の先駆者として捉え、踏み込んだ研究を元にした演奏は高く評価された。</p> <p>発声技術、演奏の質については、試験委員の間でも活発な意見交換が行われ、今後に課題を残しはするものの、博士課程修了の名に恥じない演奏の質を持っていると判断された。</p>
審査結果の要旨		<p>論文の研究と連動し、芸術科曲の作家としてのトスティを再評価するべく、演奏に取り組んだ姿勢は高く評価された。</p> <p>イタリアのトスティ協会での綿密な調査を経て発見した日本未公開曲を、自らによる日本初演を経て今回も聴衆に紹介したことの意義は大きい。</p> <p>トスティの作曲家としての評価をもう一度問いたすべく、研究と並行して行っているトスティの歌曲の、声楽家としてのアプローチには、トスティの歌曲作品への愛情が強く感じられる。また、プログラムの構成などにも、俯瞰的にトスティ作品群を捉えた強みが発揮されている。</p> <p>演奏そのものも、身体的才能に寄りかかった無思慮な演奏の対極となる、学術的な視点に立脚した真摯な取り組みが見られ、今後のライフワークとして取り組み、更に深めてくれる事を期待したい。</p> <p>しかしながら、声楽家、一人のテノール歌手として、十全にトスティ作品の魅力を伝えるには声楽技術や作品解釈の面で力量不足であり、この点は多くの審査委員から指摘された。実技系の博士課程を目指す者として、技術へのこだわり、実践の徹底が強く望まれる。</p> <p>口述諮問で発声技術についての所見を求めた際に、適切な省察、この語の課題への展望がはっきりと聞けなかったことは非常に残念であった。この点は今後の課題とされたい。</p> <p>ダンヌンツィオの詩に焦点を当てて研究、演奏に取り組んで来たことで、アンジャンプマンなどに置ける演奏解釈、韻律間のブレスの管理など、熟慮の末の演奏が期待されたが、この点も期待には届かなかった。また、舞台マナー、演奏の前後のステージでの振る舞いも、更に洗練されるよう期待する。</p> <p>総括すると、声楽家、実演家としての多くの期待に万全に答えられなかった部分があるのは事実としても、演奏のレヴェル、クオリティは博士課程修了を迎えるにふさわしい者と判断された。この3年間の声楽家としての切磋琢磨の中で予想を上回る大きな成長を見せた。博士課程を修了するにあたり、解釈や演奏のスケールなどをまとめにかかって小さく作ろうという姿勢は全く見えず、逆に大きな成長を目指して食欲に数々の試みを実践してきた。審査委員から指摘が数多く出たことも、その姿勢故、更なる成長の可能性が見える演奏になったと言って良いだろう。是非この数々の有益な指摘、示唆を今後も演奏の向上に活かし続けてくれる事を期待する。</p>

以上